

寄 書 中国の印象

——鉄連第一次、第二次訪中団に参加して——

徳 光 健 一*

鉄鋼連盟技術交流団の一員として、第一次(1979年10月)、第二次(1980年5月)と二回に亘り参加し、鞍山を初めとして8ヶ所の製鉄所、研究総院等と技術交流を行い、建設中の上海宝山製鉄所を見学する事ができた。限られた日程での交流ではその印象をまとめても、果たして得たものであるかどうかの自信も筆力もないが、一応思いつくまま私見を述べたいと思う。

1975年に四つの近代化の方針が出て、1978年には経済発展10ヶ年計画が策定され、躍進を企図した鉄鋼生産目標も、当時の三千万tを六千万tと倍增計画が設定された。しかし実施の過程で重工業優先による経済のアンバランスを生じた。農業、軽工業、重工業の各部門が比較的均衡のとれた発展となるように、蓄積と消費の合理的バランス、資金の有効利用を計る3ヶ年の調整期間が設けられた。これに伴い鉄鋼目標も四千五百万tに修正された。

今回の技術交流もこの調整の主旨に基づき、要請実施されたのであろう。鉄鋼業においては新設は現在建設中の宝山のみにして、既設製鉄所の品質向上、増産に必要な設備、操業の改善、改造、合理的管理、品種の是正、拡大等が要望されている。しかし業界では、この近代化に対し、自信、展望の点で、その体質による硬直化と、従来の社会主義優先の執心から脱却せんとする苦悩が見受けられる。

接した幹部の国造りの意欲は大きく、第一線の技術者の新生の意気込みを肌を感じ、深い感銘を受けた。かなりの知識も持ち、専門書もよく読んでおり、技術交流も熱の入った張のあるものであり、それなりの効果をあげ得たと自負している。しかし我々の意図する所を十分理解、咀嚼して貰えたかについては忸怩たるものがある。団は部門別の四班に分かれて交流を行つたが、全般の印象、感じた所を私なりにまとめてみる。

(1) 現業責任者は操業に対する知識も深く、問題意識も持つており、また作業員の技能も熟達しているが、己の現状技術レベルの評価認識が薄いように思われる。向上の目標が立てられぬまま、現状で満足している傾向が、末端部門にあるように見受けられる。一応目標を立てても、その評価、判定の行動力に欠けているのではないだろうか。まず信頼の置ける測定機器を装備し、技術水準(各工程の数値、物理的機械的特性)を知るべき

であろう。

(2) 中国鉄鋼業をみると、近代化の一貫として既に武漢の連続铸造、熱延、冷延の新鋭設備が稼動し、宝山では最新設備が納入されつつある。また自力更生により開発した2500m³級の高圧高炉、150t級転炉等も立派な操業成績を上げている。しかしこれらの技術に対する各製鉄所間の交流はあまり行われてないようである。我が国の鉄連、鉄鋼協会を中心とした技術情報交流、各学会での研究発表等が、いかに日本鉄鋼業発展に寄与したかを思い、齒がゆさを痛感した次第である。

(3) 組織、管理の面についての関心の高さには驚いた。日本の企業組織、管理体系が果たして社会組織、行政組織の異なる中国の製鉄所の幹部に理解、認識されたかは疑問に思う。製鉄所においては、革命時の党の組織と、行政組織(企業組織)の二重構造が依然として残っているように思う。自由経済競争の中で生き抜くための日本企業の組織、管理方式を受け入れるには、中国の経済体制の根幹にふれざるを得なくなる。試行錯誤をくり返しながらか国独自の答を彼等が出すことを期待したい。

(4) 近代化への開発のためには教育の振興による人材の育成が必要である。中国でも国家はもちろん、各製鉄所においても教育施設を設け、海外留学生派遣にも力を入れているが、文革、四人組時期の約10年のブランクは大きい。まずは現場技術、技能者のレベルアップを計り、実務に対する経験、知識をもつ管理者の登用、更なる育成に努めることにならう。

(5) 中国鉄鋼業では最近生産目標四千五百万tを、潜在能力の開発努力いかんでは更に五千五百万以上に伸ばし得るといわれている。確かに中国の潜在能力には大きなものがあり、管理、設備、操業面の改善、増強で大幅に生産量の拡大は期待できるかも知れない。しかし現状から判断して、インフラストラクチャーが、これに追従できるのか、未解決である環境問題、公害問題がどう処理されるのかに、意を尽くすべきだと思う。

以上思いつくままに卒直に印象を述べてみた。

今回の交流で中国側の関係者が示した熱心な討議と、心暖まる配慮には特に感銘を受けた。北京を初めとして各地を歴訪する機会を得たが、至るところで新生中国の息吹きをひしひしと感じ、また4000年以上に亘る中国

* 日本鋼管(株)重工事業部参与

の優秀な先達の歩みを見聞できたことは幸いであつた。

我々のこの二回の交流が、中国鉄鋼業の発展の、また日中友好の一助となり得ればと思ひ帰国した次第である。

る。

鉄鋼業という同じ職場で働いている両者の連帯感をしみじみと感じている今日比の頃である。

コラム

余談 工業化と工業がうける社会からの評価

中国から多くの客員研究員や留学生の方々が我国に來られるようになった。私のところにも二人の方が居られる。日常の四方山話をしている中で、話題が報酬や家計のことにも及ぶことがしばしばある。2~3DK相当の住居で東北地区の北辺に当たる場所で、光熱水費を入れても、日本円で1ヶ月800円払えばよいなどと聞くと全く夢のような話だなあと思ってしまう。食料も我国に比べると大分やすいようである。米などは価格が1桁違いそうである。しかし、工業製品は国際共通の値段かそれよりも高いようで、月収が我国のレベルと比較して10~20分の1であることを考えると、カメラ、電気洗濯機、自動車などは想像を絶する程高価なものであり、おそらく我国で会社に入りたてのサラリーマンがローンでも気楽に乗用車を買ったりすることには、我々が住居費の安さに呆然とするのと同様、彼らにとつておどろくべきことだろうと想像される。

思えば我々が学生のころ、最高級の35mmカメラが8~10万円していた。その頃、大学卒の初任給は1万円前後であつたから、一台のカメラでカメラ会社は10人位の新入社員の給料を払うことができた。しかし、今は、カメラの機能は大変進歩し、品質も確かなものになつたにもかかわらず、当時8~10万円クラスのカメラと同一イメージのカメラが、12~15万円程度になつていだけである。そして給料は当時の10倍になろうとしている。したがつて、カメラという工業製品の価値は当時の10分の1の下がり、会社は1台のカ

メラで辛うじて一人分の初任給をまかなうといつたことになつてい

る。鉄鋼業でもこの間、生産量は15~20倍に増大したが従業員はおそらく2倍にも達していない。したがつて単位生産量で養える従業員の数は、カメラの場合と同じで1桁減つたことになろう。だから高度成長といふことが起こらなかつたら、我々の国も月収のレベルも衣食住のコストも中国と同じで、工業製品は想像を絶する程高価なものであつたろうと思ふ。

高度成長のような急速な工業化は、市場の急速な拡大による需要の増大を技術の進歩に裏付けられた労働生産性の増大によりまかなうことにより可能であつたし、市場の急速な拡大は工業製品の価格上昇に比し1桁上に近い上昇を示した収入によつて可能となつた。

したがつて労働生産性を技術により容易に高められない分野、例えば技術の可能性と安全性とが常にはかりにかけられる交通機関、同一面積からの収量に限りのある農業などは、労働コストの上昇を補うため必然的に政府の介入による経済的テコ入れや兼業化を必要として、それが3K赤字のうちの2Kの構造的あるいは本質的要因となつてい

るのだからと思ふ。このように工業は我々の経済生活を拡大し工業製品の便利さなどを容易に享受できるようにした。しかし、工業に直接従事する人間の数を減して來た。つまり工業で養う人間の比率は工業製品の価格が相対的に低落することにより減少した。そしてもしかすると、工業が人をだんだん必要としなくなるにつれて、社会の中で工業を評価する人間も減るのではないかと杞憂している。

(東京大学工学部 木原諄二)